

Evaluation of young children's running movements from the perspective of growth and development and health sociology

WATANABE Kanae

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of the society and environment surrounding children on the healthy growth and development of their motor abilities from a health sociological perspective. The running movements of nursery school children affected by COVID-19 were observed in 2022 and 2023. Comparing data from May and November 2022, all the children's 25 m running times improved. However, in 2023, children's running movements barely developed. An analysis of the running records of nine children who attended nursery school at the ages of four (2022) and five (2023) revealed that in 2022, each child's record was significantly shorter in November than in May, meaning that their running ability had improved in six months. However, six months later, in May 2023, each child's running ability had declined. Children's running ability improved in 2022 (when they were four years old), but declined between the ages of four and five years and remained at this reduced level throughout the year they were five years old. To understand the reason for this strange phenomenon, we interviewed the nursery school head teacher and learned that during the COVID-19 pandemic and until 2022, maintaining and improving children's health was the most important issue in childcare. However, in 2023, the focus of childcare shifted to improving academic ability, and the time spent on physical play was replaced with "study." The stagnation in the development of running skills during early childhood, when children would normally develop such skills, was due to a health sociology problem in which "study over exercise" is prioritized even in early childhood education and care settings.

発育発達と健康社会学の観点から見た 幼児の走動作の評価

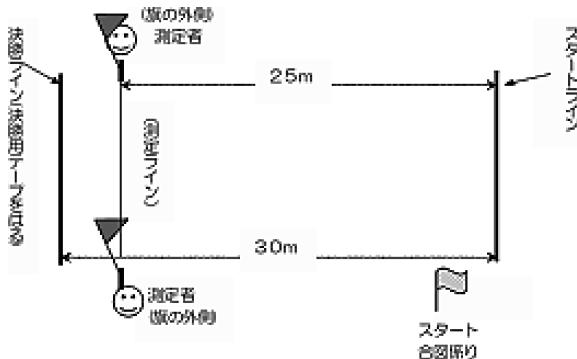
渡 部 かなえ

1. 緒言

子どもの体力・運動能力は、小学校入学以降は毎年学校で実施される全国共通のテストによって測定され、文部科学省によってその調査結果が報告されている。その調査報告によると、1960年代をピークに子どもたちの体力・運動能力は低下の一途をたどっていたが、新体力テストの導入を機に、文部科学省の指導の下、各県に健康づくりや運動の推進モデル校が指定され、行政と教育機関が協力して教育支援を行っていった結果、子どもたちの体力・運動能力の低下傾向は抑制され、種目によっては向上の兆しが見えた¹⁾。しかし2020年の新型コロナウイルス感染症（以下、コロナと記載）のパンデミックで子どもたちにも外出制限が課せられ、登校することもできなくなって運動の機会が失われ、その結果、体力・運動能力は低下した²⁾。

幼児に関しては、文部科学省ではなく研究者によって4回（1986年、1997年、2002年、2008年）行われた。それらの調査報告によると1986年に幼児の体力は最も高く、1997年に一気に低下し、その低下した状態が2008年までずっとつづいていた^{3)、4)}。

その後、文部科学省が、幼児の体力の向上が生涯に渡る健康の維持増進に重要なとの見解の元、幼児の体力・運動能力の向上を目指すプロジ

図1 25m走の実施方法⁵⁾

エクトを開始した⁵⁾。

しかし、コロナのパンデミックで幼児もまた自宅待機せねばならない状況になり、歩行をはじめとする動く機会が著しく減少した⁶⁾。

本研究は、コロナの影響を受けた園児の走力の育ちの観察をとおして、子どもを取り巻く社会や環境が子どもの運動能力の健やかな発育発達に及ぼす影響を、健康社会学的な観点から検証することを目的として行った。

2. 方法

調査の対象は研究協力園（保育所）の園児で、コロナによる様々な自粛が解除され始めた2022年と、日常生活がコロナ前に戻り始めた2023年の春（5月）と秋（11月）に大学のグラウンドに園児を招いて、走動作と投動作の力を計る運動能力テストを行った。本稿ではそのうちの走動作についての検証結果を報告する。

テスト方法は、大学グラウンドに設置されているタータントラックを25m、園児に全力で走ってもらい、タイムをストップ・ウォッチで計測し（図1）、走動作の撮影も併せて行った。

表1 2022年の25m走の記録（単位：秒）

幼児	年齢区分	2022年5月の タイム	2022年11月の タイム	11月と5月の 記録の差（発達）
a-4	4	6.85	5.45	1.40
b-4	4	6.98	6.11	0.87
c-4	4	6.87	5.80	1.07
d-4	4	9.12	5.67	3.45
e-4	4	7.96	6.16	1.80
f-4	4	6.46	5.87	0.59
g-4	4		5.92	
h-4	4	7.46	6.76	0.70
i-4	4		6.55	
j-4	4	8.12	5.91	2.21
k-4	4	7.07	6.43	0.64
l-4	4	6.35	5.12	1.23
m-4	4	7.62	5.63	1.99
n-5	5	6.68	5.62	1.06
o-5	5	6.70	5.12	1.58
p-5	5	7.25	6.90	0.35
q-5	5	6.81	6.08	0.73
r-5	5	6.75	5.38	1.37
s-5	5	6.46	5.95	0.51
t-5	5	6.51	5.73	0.78
u-5	5	6.21	5.28	0.93
v-5	5		6.15	

3. 結果

表1は2022年、表2は2023年の、園児の25m走の記録（タイム：秒）である。a～mの13人は同じ子どもで、2022年度は4歳児、2023年度は5歳児であった。アルファベットの後ろの4・5の数字は年齢区分（4歳児か5歳児か）を示している（例 a-4：a児の4歳時、b-5：b児の5歳時）。

表2 2023年の25m走の記録（単位：秒）

幼児	年齢区分	2023年5月の タイム	2023年11月の タイム	11月と5月の 記録の差（発達）
nn-4	4	7.48	6.18	1.30
oo-4	4	7.59	6.49	1.10
pp-4	4	7.34	6.81	0.53
qq-4	4	6.19	5.76	0.43
rr-4	4	5.93	5.68	0.25
ss-4	4	7.12	6.36	0.76
tt-4	4	7.03	6.23	0.80
uu-4	4	7.46	7.61	-0.15
vv-4	4	6.68		
ww-4	4	7.14	5.87	1.27
xx-4	4	6.52	6.31	0.21
yy-4	4	8.86	7.68	1.18
ZZ-4	4	7.25		7.25
a-5	5	5.95	6.12	-0.17
b-5	5	6.13	6.05	0.08
c-5	5	6.31	6.06	0.25
d-5	5	6.03	5.74	0.29
e-5	5			
f-5	5	5.76	5.51	0.25
g-5	5	5.56		
h-5	5		6.84	
i-5	5	6.59	6.67	-0.08
j-5	5	6.27	5.84	0.43
k-5	5	5.84	5.75	0.09
l-5	5	5.78	5.59	0.19
m-5	5	6.05	6.20	-0.15

25m走は速く走れた方がよいので、タイムの数字が小さい方がよい記録である。11月と5月の記録の差は、11月は5月（半年前）に比べてタイムがどれだけ短縮したかを示しており、この数値が大きいほど走力が向上（発達）したことになる。この差の数値がマイナスになった場合は、半年前より走るのが遅くなってしまったことを示す。

表3 9名の幼児の2年間の走力の変化（単位：秒）

幼児	2022年5月	2022年11月	2023年5月	2023年11月
a	6.85	5.45	5.95	6.12
b	6.98	6.11	6.13	6.05
c	6.87	5.80	6.31	6.06
d	9.12	5.67	6.03	5.74
f	6.46	5.87	5.76	5.51
i	8.12	5.91	6.27	5.84
j	7.07	6.43	5.84	5.75
l	6.35	5.12	5.78	5.59
m	7.62	5.63	6.05	6.20
平均	7.27	5.78	6.01	5.87
標準偏差	0.88	0.38	0.20	0.24

2022年度の5月と11月の記録を比べると、2回ともテストを受けた子どもはどの子もタイムが短縮しており、半年間で走力が向上していた。平均で1.45秒、最も短縮した子どもは2.21秒も早くなっていた。

2023年度の5月と11月の記録を比べると、タイムが短縮した子どもが多くかったが、平均は0.12秒で、中には5月より11月の方が走るのが遅くなってしまった子もいて、前年に比べると半年間で走動作はほとんど発達していなかった。

4歳時（2022年）と5歳時（2023年）に在園しており、2年間とも春と秋の2回（全計4回）のテストに参加した9名の幼児の25m走の記録の変化を見てみると（図2）、2022年はどの子も5月に比べ11月は記録が著しく短縮しており、半年で走力が向上したことが分かる。ところが、その半年後の2023年5月には、どの子も25m走るのに長い時間がかかってしまっていて、走力が低下してしまっていた。同年11月には記録がやや短縮した子どももいるが、更に走るのが遅くなってしまった子どももあり、2022年度（4歳時）とは異なり2023年度（5歳時）は半年間で走力の向上はみられず、この子どもたちの走力は、2022年度（4歳時）には発達し

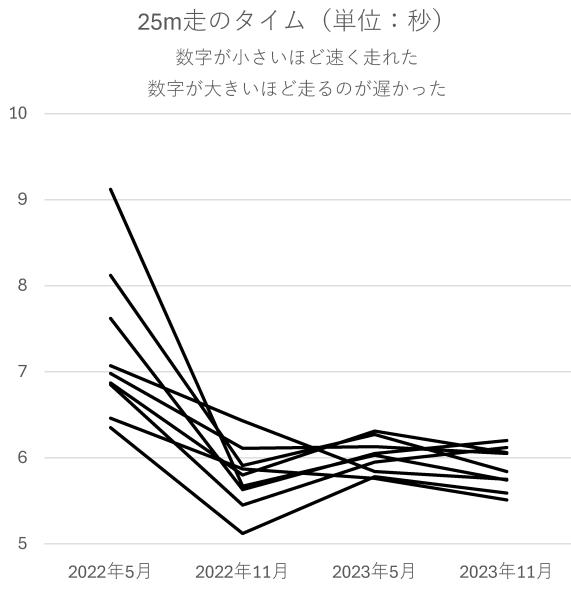


図2 9名の幼児の2年間の走力の変化

たが、4歳から5歳になる間に低下してしまい、5歳児の1年間はその低下したままの状態であった。

4. 考察

幼児期は基礎的な運動能力が発達する時期であり、通常の生活を送っている健常児は、走動作のような基礎的運動能力は向上する。コロナ禍で幼児も様々な自粛や制約のために運動の機会が減ってしまうという健康社会学上の問題で運動能力の発達に負の影響が及ぶことが懸念されていたが⁶⁾、本研究の調査では、コロナの影響がまだ随所で見られた2022年よりも、コロナの影響が緩和された2023年の方が幼児の運動能力の発達が妨げられていたという結果が得られた。非常に奇異な状況であり、原因を探るた

めに、協力園の施設長・保育士に詳細なインタビューを行ったところ、以下のことが明らかになった。

コロナ下では子どもたちの健康の維持増進が保育の最重要課題で、制約下でも少しでも丈夫な体を作るための活動に重点が置かれていた。しかし2023年に保育の重点課題が学力をつけることに代わり、それまで運動遊びにあてられていた時間が、学習ワークや学習ドリルに取り組むなどの「勉強」に変えられたとのことであった。そして、このように保育所で子どもたちが「勉強」することを、好意的に受け取り喜んでいる保護者が多いとのことであった。限られた保育の時間で何もかもやることはできないので、重点課題を決めて保育計画を立て、それに基づいて保育を行っていくことになる。何を重点課題とするかは、保育所の保育の方針や子どもたちのニーズを総合的に勘案して決められるが、スポンサーである保護者の要望も無視することはできず、幼児期から「学力」に強い関心を持つ保護者は多い。よって「勉強」に重点を置いた保育を行う幼児教育・保育の施設は増えており、急速に少子化が進行している今、保護者のニーズにこたえる保育を行うことが保育所の経営戦略にとっても不可欠なのであろう。

しかし、実際の学習内容は、小学校では学べないことではなく、ほとんどが小学校の先取り学習であり、小学校に入学して学ぶことを少し早く、教育の専門家ではなく保育の専門家の指導のものに学ぶことにどのような意義があるのか、疑問は残る。それよりも、時間を気にせず（小学校では45分ごとの時間割で活動が区切られている）、思い切り体を動かして、友達と一緒に遊ぶことを通して、丈夫な体を作り、様々なことを体や五感を通して経験する幼児期の運動遊びの機会が、どんなに大切でかけがえのないものであるか、そこで身につけ記憶の底にしまわれるものが、その後の人生を生き抜くためのどんなにしっかりした根っこになるのかを、保護者の皆様は保育者の方に、もう一度考えて頂きたいと思う。

通常なら発達することが当然の幼児期に走動作の発達が停滞したことの背景には、幼児教育・保育の場でも「運動より勉強」が優先されるという健康社会学上の問題があることが分かった。

5. 謝辞

この研究は JSPS 科研費 23K02319 の助成を受けてまとめることができました。

【参考文献】

1. 文部科学省、令和5年度全国体力・運動能力・運動習慣調査報告書、第1章 調査結果の概要、
https://www.mext.go.jp/sports/content/20231218-spt_sseisaku02-000032954_203.pdf
2. 産経新聞、小中高校生の運動能力低下、コロナ禍影響か 令和3年度体力・運動能力調査、2022年10月12日、<https://www.sankei.com/article/20221012-VOOOOC345ZBKRTJXA5RWEGDZHCl/>
3. 森司郎、杉原隆、吉田伊津美、筒井清次郎、鈴木康弘、中本浩揮、近藤充夫、近藤充夫 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力、体育の科学 60, pp. 56-66, 2010。
4. 杉原隆、森司郎、吉田伊津美、近藤充夫、2002年の全国調査からみた幼児の運動能力、体育の科学 54, pp. 161-170, 2002。
5. 文部科学省、体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告、第3章 調査実施要領と調査結果、1. 幼児の運動能力調査（調査2）、https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/04/07/1304379_1.pdf
6. 朝日新聞デジタル、コロナ禍で幼児の歩数2~6割減、親より影響受けやすく、2020年9月3日、<https://www.asahi.com/articles/ASN925VTXN92UBQU001.html>